

目次	■第19回年次大会特集	2
	大会を振り返って…2 石井米雄奨励賞…9	
	■2020年度理事会議事録抄録	10
	第1回理事会…10 第2回理事会…12 第3回理事会…13	
	■地区研究会報告	14
	中部・関西…14 中国・四国…14 九州…15	
	■地区研究会案内	16
	北海道・東北…16 関東…16	
	■お知らせ	18
	会員新著紹介…18 Web管理・広報委員会より…18	
	学術委員会より…18 学会誌編集委員会より…19	
	事務局より…20 新入会員紹介…21	
	NL委員会より…21	
	■編集後記	22
CONTENTS	■Report on the 19th Annual Conference on Japan Society for Multicultural Relations	2
	Overview of the 19th Annual Conference on Japan Society for Multicultural Relations…2 The Ishii Yoneo Award…9	
	■Records of the 2020 Board Meetings	10
	■Reports from the Regional Study Meetings	14
	Chubu・Kansai…14 Chugoku・Shikoku…14 Kyushu…15	
	■Announcements on the Regional Study Meetings	16
	Hokkaido・Tohoku…16 Kanto…16	
	■Announcements	18
	New Publications…18	
	From the Web Committee…18	
	From the Academic Affairs…18	
	From the Journal Editorial Committee…19	
	From the Business Office…20	
	Introducing New Members…21	
	From the News Letter Committee…21	
	■Editor's Notes	22

多文化関係学会 第19回年次大会

開催日 : 10月24日 (土)

会場 : Zoom 開催

ホスト校 : 近畿大学

第19回年次大会を振り返って

第19回年次大会委員長 小坂 貴志(神田外語大学)

2020年10月24日(土)、多文化関係学会第19回年次大会が近畿大学をバーチャル会場校として開催されました。多文化関係学会としては初の試みとなるオンライン大会が成功裡に終わったのも、発表していただいた先生方、ご参加くださった先生方、そして年次大会準備委員の先生方のおかげであり、この場をお借りしてお礼を申し上げます。本当にありがとうございます。

オンラインで気軽に集まれることに気づいた諸学会・研究会により、次から次へと大会・研究会情報が配信される中、果たして個人の会員による研究発表の機会がどの程度増えているか疑問に思い、今回の年次大会では研究発表者を主役に起用することにしました。スリムでコンパクトな大会ゆえ、無理なく全発表に参加することができ、「目にも優しい」大会運営となったとのコメントをいただいたのは準備委員会冥利に尽きる思いでした。

年次大会の開催校を引き受けてくれる会員の方が年々見つかりづらくなっている現状では、持続可能な方法としてオンライン開催をひとつのオプションとして強く推奨いたします。対面

の良さは当然のことながら忘れてはいないし、コロナ以前に戻りたい気持ちもわからないではありません。一方、対面開催に要する手間暇やコストを考えるにつけ、全国どこにいても気軽に発表、参加できるオンライン大会は毎年とまでは言わないが、隔年開催ぐらいの頻度でもよいのではないのでしょうか。

準備委員会は、前回の大会中に結成され、対面による打ち合わせを1度おこなった以降、すべてオンラインでの打ち合わせとなりました。大会後のこととなりますが、「こんな会社があったら働いてみたい」と某委員の先生がコメントしてくださったように、和気あいあいとした中にも、一本筋が通った話し合いや準備は「できない」ではなく、「できてしまう」という確信の元、進められた印象だけが残りました。そのためにも、背伸びせず、無理のない大会内容の設定が不可欠となるでしょう。

以下、準備委員の先生方から、具体的かつ臨場感溢れるスタイルで当日の様子を振り返っていただきました。しばしのユーモアも同時にお楽しみください。



年次大会準備委員会の様子(第2回)

ホストがない?!

出口 朋美 (ホスト校：近畿大学)

午前のセッションが無事に終わり、12時10分から総会へ。議長の石黒先生のご協力もあり会はスムーズに進んでいた。議長の解任後、私から少しご挨拶をさせていただき、総会が無事終了。安心とともに、ポチッと、やってしまった。「会議を全体に終了する」ボタンを（1つ目の間違い）。おそらく心の声が指先に伝達してしまったのであろう（残念ながら、よくある）。大会の運営と同時に行われていた3歳児の世話。

「ママー」と呼ばれ、そのボタンを押した意味をあまり考える隙もなく、私は娘に呼ばれるままパソコンを後にした。

午後のセッションの6分前、司会の奥西先生から「ホスト権限を私に戻していただけますか？」との連絡。午後はオーディエンスとしての参加であったため、気が緩んでいた私は全体終了のボタンの意味によりやく気づく。慌てて自分のアカウントでログインして（2つ目の間違い）B会場へ。ホスト権限を戻そうとするとなぜか画面共有ボタンがすっかり消えている。私にも、奥西先生にも、ご発表される小張先生にも画面共有ボタンが見当たらない状態となっていた。ファイルの大きさもあってチャットでファ

イルを送ることもできず、ただ過ぎていく時間。焦れば焦るほど、思考が止まっていく。小張先生ごめんなさい。増えていくオーディエンスの人数。当日用掲示板を使うか。

あっ、B会場を設定したアカウントでなければホストとはならないのか！ようやく鈍い頭が働き、B会場用のアカウントとパスワードを小坂先生にお尋ねする。ログインしなおし、ようやく「ホスト」の文字が見える。この時点で発表開始後10分経過していた。司会の奥西先生をホストに、小張先生に共同ホストになっていただき、ようやく発表が始まった。その後は奥西先生と次の司会兼発表者の湊先生の機転の効いたスケジュール調節とプロフェッショナルな進行のおかげで、なんとセッション自体は時間通りに終了したのでした。

今回のオンライン大会では、クリック一つでセッション全体に影響を与えてしまう恐ろしさについて、身を持って学んだ気がします。このようなことを想定してか、発表の間に10分の空き時間を設けていたのも、得策であったと思います。この場をお借りして小張先生に改めてお詫び申し上げます。そして小坂先生、奥西先生、湊先生、サポートいただき本当にありがとうございました。

LINEとの併用

奥西 有理（岡山理科大学）

多文化関係学会年次大会の準備委員会は、今までも遠方の先生方同士、学会当日までの準備を対面で打合せすることなく、バーチャル委員会として進めてきたケースも多かったと想像する。しかし今回は、コロナ禍で、準備活動だけでなく、当日の運営も完全なバーチャル委員会として進めなくてはならなかった。

準備委員同士の連絡手段としては、Zoomによる顔合わせや予行演習の他に、LINEが併用された。LINEは、当日の不測の事態に関する準備委

員同士の密な連絡というトラブル対応に役立ったが、それ以外にも、普段からのスモールトークを含めたコミュニケーションがトークルーム上で交わされ、チームワークづくりにも役立っていた。小坂先生と出口先生の微笑ましいリーダーシップと若い先生方のフレッシュなパワーを、LINEのやりとりからも感じ取ることができた。

SNSの問題が指摘されることが多い中、バランス感覚を持って利用すれば、有意義な効果を生み出すことができるし、そのために必要なツールであると実感することができた。

大会中のタイムマネジメント

水松 巳奈（東洋大学）

オンライン大会において、気を使わなければいけないのが、時間管理である。Zoomがいくら便利なツールであると言っても、各会場のタイムマネジメントをしてくれる機能までは付いていない。ここはアナログな管理が必要であった。発表の進度・発表者の交代のタイミングが、各会場ですれてしまうと、参加者は混乱に陥ってしまう。実行委員の事前の打ち合わせでは、この点について懸念が挙げられたため、念入りに計画が練られていた。

会場Bの1人目の司会であると同時に、1人目の発表者であった私は、発表をしながらも時間管理をするという重大任務を任されていた。1人目の発表者から予定していたスケジュールから遅れてしまえば迷惑をかけてしまう。そんなことを頭の片隅に置きながら、発表スライドの横にタイマーをセット。司会中も発表中も、定期的にこのタイマーを見ていた。

その他、大会中は実行委員同士、LINEで随時連絡を取り合い、進行を報告し合った。このような入念な計画のもと、進行の大きな遅れや、機器トラブルは避けられ、全体としては順調に大会を進めることができたと思う。

ただ1つ、焦った場面があったとしたら、昼休憩後の会場Bセッションの立ち上げが遅れたことである。その時の私と言えば、自分の司会部分

を終え、簡単に昼食をとろうと思っていた頃であった。すると、廊下で久々に会った同僚から話しかけられ（大会には職場にある研究室からアクセスしていた）、気づけばお昼の休憩時間から10分経過していた。急いで戻ってみると、滞りなく大会が再開されているように見えた。が、ふとLINEを見てみると、大量のメッセージ。その中には、私に直接助けを求めているものもあった。私は、メッセージを一気に読み、事態を把握したものの、その時には後の祭り。しっかりと他の委員が対応済みであった。我が大会実行委員のチーム力と、仕事の速さの賜物である（と同時に申し訳無さがこみあげてきた）。

大会実行委員会は、昨年の大会時に発足され、それから定期的な話し合いの場が持たれつつも、会議は全てオンライン。結局、昨年の大会時に顔を合わせた際が、最初で最後の実行員対面の場となった。それでも、小坂先生と出口先生の頼もしいリーダーシップにより、和やかに、しかし真剣に準備された大会であったと思う。本学会の年次大会に参加したのは、昨年と合わせて今回が2回目。そんな私を実行委員として温かく迎え入れてくれた実行委員の皆さま、そして、大会関係者全ての方に御礼申し上げたい。それにしても、近大マグロを食せなかったことが悔やまれる。来年度は是非対面での大会が開催され、開催場所の名物をたらふく堪能したい。

発表者・司会者・聞き手

中野 遼子（大阪大学）

今回初めて学会の大会委員会を担当させていただいた。そして運営委員として初めての学会がオンライン開催となった。今回、私は発表者であり司会者であった。発表をしながらの司会は大変であったが、オンラインだったので、発表者の移動がなく、自然に司会と発表者の切り替えができたように思う。他にも、今回オンライン開催だからこそ可能になったことが2点あった。

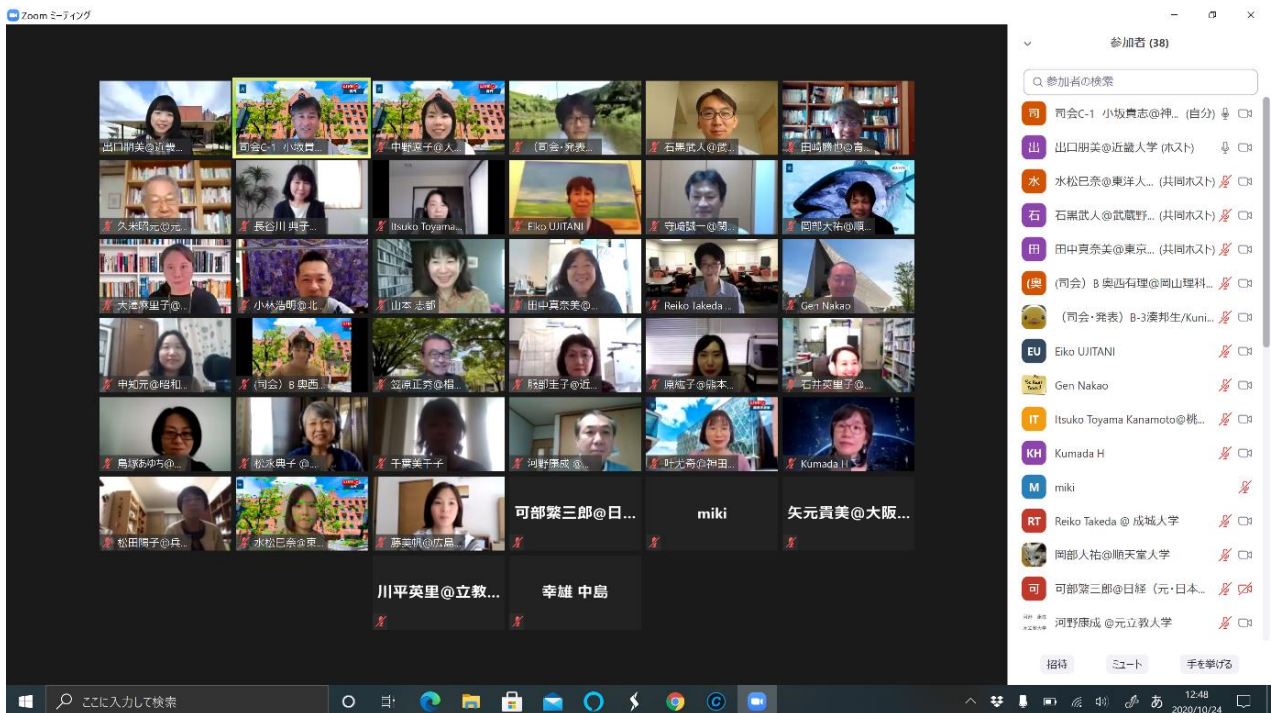
まず、学会当日、私は大会委員だけでなく、所属大学の学生交流イベントのオンライン説明会も担当することになっていた。小坂先生によるスケジュールのご配慮と他の委員の先生方のご協力のおかげで、途中まで学会運営を担当して、15:00からオンライン説明会を実施することができた。オンラインだったので、PC一つで準備ができ、業務の移行がスムーズであった。もし、対面の学会だったら、学会の発表・司会 & 説明会の主催をほぼ同時に行うことは不可能だっただろう。移動せずに複数の業務対応が可能になったことは驚きであった。

2つ目は、海外にいる研究者の渡邊先生（メルボルン大学）と一緒に共同発表ができたことである。2020年2月の時点では、どちらかが日本あるいは海外に出張して発表することを計画していたが、オンライン開催が決まってからは多文化関係学会での発表を決めた。調査インタビューもオンラインで実施し、渡邊先生はオーストラリアから参加いただいた。インタビュー協力者はよく知っている方たちだったのでオンラインでも問題なく実施できた。オンライン開催でなかったら、おそらく渡邊先生ともう一人の共同発表者の菱田さん（一般社団法人イケダ大学／石橋商店会）も共同発表だけでなく、学会参加さえもできなかつたと思う。お二方とも初めての多文化関係学会の参加を楽しまれたようで、ネットワーキング構築にも繋がった。学

会員以外の方が気軽に参加でき、会員の皆様と繋がれたことはオンライン学会の利点であったといえる。

もちろん、オンライン学会の限界もある。まず、インターネットトラブルの危険性である。対策としては、会場につき最低3名の委員の配置が必要だと感じた。そして、オンラインでは交流の機会が作りにくいことである。発表の待ち時間は沈黙の時間が流れていた。休憩毎にブレイクアウトルームを作る案もあったが、今回は実施できなかった。その代わりに、発表が早く終わった会場Aは自由な交流の場としてオープンにしたままにした。岡部先生、大澤先生、そして参加いただいた学会員の皆様のおかげで、オンラインの交流でも盛り上がることができた。時々奥西先生が様子を見に来てくださり、安心感を覚えた。

最後に、今回オンライン開催が決まった時は、何から手をつけて良いのかとても不安であったが、小坂先生が冗談で雰囲気や和ませながら素早く役割分担・スケジュールを決めてくださり、出口先生がその都度対応してホームページの更新や重要事項のまとめをしてくださった。大澤先生は大会当日の正確な時間管理とトークテーマの提案、岡部先生はネット関連のアドバイス、奥西先生は会計の素早い確認と対応、海谷先生は美しい抄録編集、シャザディグリ先生は大変な時期に逐一返信をくださりチームの潤滑油となってくださった。水松先生はミーティング中の鋭い指摘と的確な抄録確認、叶先生も数々の大会運営の経験による指摘・提案と大会当日の案内スライドの作成等、委員の先生方には本当にお世話になり、勉強させていただいた。今後は、対面とオンライン開催でできることを整理し、学会の新しい可能性を探ることが重要だと考える。今回の挑戦と各先生方のレポートが今後の多文化関係学会の大会運営につながれば幸いである。



プログラムと抄録集

海谷 千波（杏林大学）

年次大会の開催日と本務校における総合型選抜の日程が重なってしまい、実は、年次大会当日は参加できませんでした。また、家庭の事情もあり、プログラムと抄録集の作成においても携わることができたのは初稿の完成までで、完成は水松先生、シャザディグリ先生、そして出口先生に御一任する形となってしまいました。大会準備委員の先生方にはご面倒をかけるばかりで、申し訳ない気持ちと感謝の気持ちでいっぱいです。

さて、オンライン開催となった年次大会のプログラムと抄録集の作成を通じて、気づいたことが3つあります。まず1つ目は、発表者の先生にご指摘いただいたことですが、「抄録執筆要綱」のテンプレートに修正要件が残っていることです。結果的に、抄録集を完成させる際に、発表者への修正依頼も生じてしまうなど、構成やスタイルの調整に大変苦労しました。発表者が使いやすいテンプレートを「再」構築する必要があるのかもしれません。

2つ目は、公式サイトとプログラムの情報の共通化・差別化です。PDFで作成したプログラムには記載されているZoom会場URLとミーティン

グID・パスワードが、公式サイトには記載されていなかったためか、大会当日になって会場に関する問い合わせがありました。公式サイトとプログラム、それぞれの役割を見極めつつ、必要な情報を、的確に配信する重要さに気付かされました。

そして3つ目として、オンライン開催に伴い、印刷された媒体がない年次大会は初めてだと思いますが、プログラムと抄録集を作成しながら思い出したことがあります。それは、学会設立当初はニュースレターがウェブ配信のみだったことです。2020年現在では当たり前のような感じもしますが、2002年設立当初にウェブ完結型情報配信を実践していた多文化関係学会は、時代の最先端にいたのかもしれませんが。

それまでにない新しいあり方を模索する・・・そのような意思を継承するという意味で、例えば、ARやVRの技術を活用した、音声や映像を視聴できるプログラムや抄録集があっても面白いのではないのでしょうか。

個人的な感想となりましたが、本稿が来年の年次大会の開催方法に合わせたプログラムや抄録集作成、そして大会運営のヒントになれば幸いです。

質問応答の形式

叶 尤奇（神田外語大学）

今回は初めてのオンライン大会の運営に携わることになりました。C会場の司会・タイムキーパーに加えて、朝の最初の発表者でもあったため、寝坊せず開始時間前にZoomミーティングを開くことが最初の課題でした。そのため、夫だけでなく、中国の実家にいる父親にもモーニング・コールをお願いしました。また、時間をオーバーしないことを念頭に置き、パソコンの隣の時計に常に目を配りながら研究報告を行いました。なんとか時間内に報告を終えたものの、先生方のご質問に対してゆっくり考えずに答えてしまいました。その後、あまり回答になっていないことを深く反省しました。

自分の研究報告が終わり、少し肩の荷を下ろしたところ、内藤伊都子先生（東京福祉大学）の「日本で就職した元留学生の入職半年後の就職状況」に関するご報告がなされました。内藤先生の優しいご発言があり、緊張感が少しずつ和らぎ、研究報告に集中できるようになりました。内藤先生のご報告が終わり、質問応答のセッションに移ったところ、わずかな沈黙がありました。今冷静になって考えてみれば、参加者の皆さんはきっと質問を考えていらっしやっ

4つの研究発表

大澤 麻里子（東京大学）

本大会で私が参加したA会場（テーマ：多文化共生・交流）での4つの研究発表について報告する。一人目の中野氏は、メルボルン大学からの留学生と地域住民との交流に関する実践的な研究について発表された。実践報告に続き、商店街の受け入れ関係者へのインタビュー・データを用い、留学生が地域に与える影響について、受け入れ側からの視点からM-GTAを用いての分析結果を伺った。留学生に親近感を抱くきっかけとなったり、積極性を獲得したり、商店街への国際化への気づきを促す存在でもあることが明らかにされた。受け入れ側へのインパクトに関する新たな知見を得ることができ、興味深く発表を伺った。

たでしょうが、当時、その一瞬の沈黙に耐えられず、つい複数の質問をしてしまいました。幸いなことに、奴久妻先生は、チャットにて質問を送ってくださったため、私の「暴走」が止まり、第2報告が無事終わりました。

C会場の午前中の最後のご報告は、志賀玲子先生による「中国人交換留学生から見た日本社会の受け入れ姿勢」でした。志賀先生には、詳細な資料を提示し、丁寧な説明を行っていただきました。参加者からも複数の質問が入りました。C会場の報告者と参加者の皆様のおかげで、午前中の発表が無事終了しました。

今回の大会を経験したことによって、オンラインの発表において、参加者と発表者の間のコミュニケーションがどのように行われるべきかが課題として感じました。今後、事実確認のような比較的短い質問であれば、チャットを通じて送っていただくことが良いかもしれません。それに対して、比較的長い質問や感想に関して、マイクのミュート機能をOFFにして音声が出るようにしていただけたら、参加者と発表者との間の対話がより行われやすいと思いました。さらに、そのようなインターアクションを通じて、バーチャルな会場の雰囲気盛り上げていく方法の1つであると推察します。

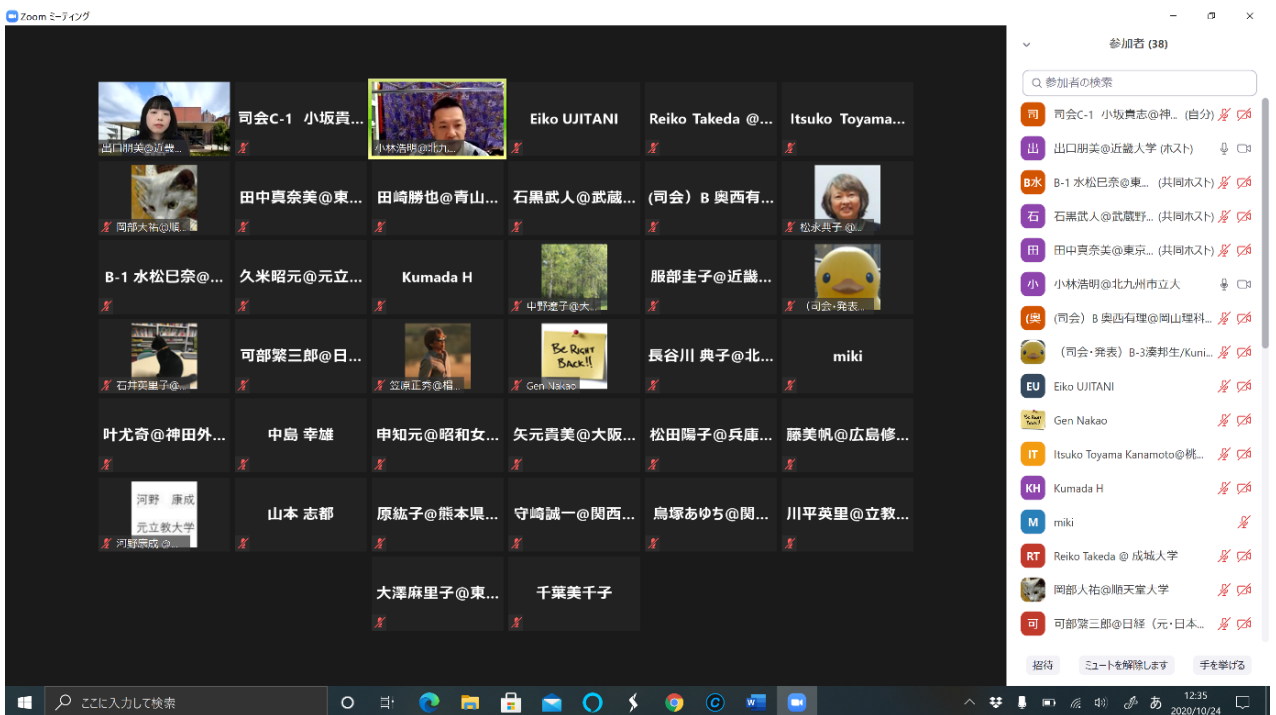
次に松永氏より多文化共生に向けた異文化接触の仕掛けに関する発表がなされた。松永氏は、地域住民の異文化に対する接触不安軽減の方法を考える上で、まず、オルポートの接触仮説（1954）や異文化間協働学習研究といった先行研究を概観し、不安や偏見を軽減し、共生を促すための新たなツールとして「しかけ学」（松村, 2016）に着目した。直接的な接触に関する研究に関しては、現在までに多くの知見の蓄積があるが、「しかけ学」とは間接的に他者の認知に働きかけ、行動変容を促すアプローチであり、異文化接触と「しかけ」を結びつけた点が非常に画期的であり、このアプローチは今後、異文化接触分野で様々な応用が期待できるのではないかと思いを巡らせた。

三番目の発表者の原氏からは学生の共同的映像制作の実践研究を伺った。ホール文化と時間(1983)の理論を背景に、「令和」という新年号を題材に学生たちが短編フィルムを撮影するという先駆的な取り組みについて紹介頂いた。映像制作を通して、学生が互いの時間に対する認識の違いに気づき、協働しながら、教室の外へと主体的に学びの場を拓げていく様子が伺えた。受講者は日本人のみとのことであったが、英語で作成し、完成した短編フィルムを海外に発信するということが前提となっており、作品を完成させるだけではなく、オンライン上でのコミュニケーションの外への拡がりという要素が特に魅力的に感じた。また、オンライン授業が常態化した現在において、教育活動へのデジタル技術の効果的な活用の一つのモデルケースとなるのではと考えた。

最後に異文化学習手法に関する熊田氏のご発表があった。異文化理解のための教育における目標を、ベネットのDMIS(1986)の最終段階である「違いとの統合」に該当する行為を自ら選択することのできる人材育成であると位置づけ、その目的のための教室活動として、社会の

マジョリティの特権に対する気づき・自覚を促す「体験型アクティビティ」(出口, 2019)の具体的な進め方について説明頂き、さらに、このアクティビティを経験した学生の気づきについて報告された。学生の気づきの分析には、体験後の個人の振り返りを質問紙票へ記入してもらう手法を取り、質問紙でも対話による振り返りに匹敵する気づきがあったことが言及された。紹介された教室内の活動は短時間でできるシンプルなものでありながら、体験を通して学生に考えさせ・アクションを起こさせるアクティビティであり、対面授業の機会があれば、是非実施してみたいと思った。

人の移動が制限され、人的交流や対面授業が難しい状況下で、オンライン上で、学生たちの「交流」や「学習体験」をどのように再現すればいいのか、学びや態度の変容を促す「しかけ」をどのように作ればいいのかなど、悩むところが多い日々であるが、これらの4つのご発表からは、今後の教育活動を考える上で様々なヒントが頂け、非常に示唆に富むセッションであった。



多文化シナジーは「裏舞台」でも

岡部 大祐（順天堂大学）

初のオンライン大会で生じた「裏舞台」のお話をしてみたいと思います。オンラインでの会議にせよ授業にせよ、クリックひとつで出入りできる簡便さは多くの方が実感することと思います（今回の大会でも研究発表会場間の移動が一瞬で可能になると好評の声も聞きました）。一方で、その効率性ゆえに、会場間を移動する途中で、食事をしながら、談話室での談笑といった、学会参加者である研究仲間とのインフォーマルなインタラクションの生じる「余白」もまた制限されてしまいがちです。

しかし、本大会では、急遽キャンセルになった研究発表のA会場を「カフェ・スペース」のように使用するという大会準備委員会の判断により、その「余白」が生まれました。その結果として、A会場では、本学会創設メンバーから大学院生まで、研究関心もアプローチも異なる、ふと立ち寄った参加者たちが会し、日本社会での多文化関係に関わる社会問題といったさまざまなトピックについて「裏舞台」での対話が発生、大変に盛り上がりました（研究発表会場に引け

を取らない盛り上がりぶり！？）。ひとつの学問分野の学会であれば、参加者間で社会的立場や知識や経験値による序列が生じやすくなり、創造的な対話が阻まれることも少なくありません。一方、本学会では複数の視点、アプローチ、方法を許すため、会員の専門範囲が広く、それぞれが有している専門知識や事例が異なります。それゆえに、社会的地位や学会所属期間等にかかわらず、会員同士が互いに「新情報」を提供可能性が高く、そのような対話が今回の「余白」に創造されました。これは、物理的な会場であれば知り合い同士で固まって談笑するのに対し、今回のZoomミーティングでは（ブレイクアウト・ルームを使用することも可能ではありませんでしたが）全員が一堂に会する形であったことも一役買ったものと想像されます。

多様な関心を有する本学会であればこそ、このような多様性を生かす場、「縁側」を創出していくことが、学会の更なる活性化につながるのではないかと、オンライン形式の本大会の「裏舞台」で、今後の本学会のポテンシャルを感じさせられる貴重な時間となりました。

▶ 第19回年次大会特集

石井米雄奨励賞

今年度の全国大会では石井奨励賞への応募はございませんでした。次年度は応募資格のある会員の皆様の応募をお待ちしております。

（学術委員会委員長：岡部 大祐）

2020年度多文化関係学会 理事会議事録 抄録

■ 第1回理事会 議事録

日時：2020年6月7日（日）13時半～15時

場所：オンライン開催（Zoom）

出席者：江藤由香里、岡部大祐、岡村郁子、出口朋美、田崎勝也、金本伊津子、河野康成、小坂貴志、武田礼子、田中真奈美、内藤伊都子、馬場智子、松井一美、湊邦生
（敬称略・50音順）

欠席者：畠中香織（委任状あり）宇治谷映子、小林浩明（敬称略・50音順）

1. 報告事項

(1) 第19回年次大会準備委員会からの報告

小坂貴志大会準備委員長から、第19回年次大会のオンライン実施について報告がなされた。前回の理事会でオンラインでの年次大会を検討していくことを確認し、今回の理事会の時期に状況判断をする方向で進めてきた。会員に年次大会のオンライン開催についてアンケートを実施し、これまでに50名ほどの会員から回答を得た。得られた回答を見ると、年次大会の中止には多数が反対しており、オンライン開催に前向きな回答が多く確認された。また、会員のオンライン環境およびオンライン・ツールの使用経験の有無を鑑みると、オンライン開催は可能ではないかと考えられることが報告された。

オンラインでの年次開催を実施する場合には、基本的には研究発表のみを実施予定とする。一方で、参加者同士の意見交換が可能な場を設けることも案として考えている。実際にオンライン開催で決まるなら、今後、大会準備委員会で協議し、実際の運用をテストしていきたい。大会参加費については、他学会の事例も参照しながら協議を進めていく。

(2) 事務局からの報告

田中真奈美事務局長からは、学会員の状況について、以下2点の報告がなされた。(a) 総会員数は303名（正会員235名、シニア会員4名、学生会員64名）となっている。未納の会員については順次対応中である。(b) 現在会員名簿を精査しており、3年間未納だった会員は除籍の処理をしている。今回、抜け漏れがあり、すでに4年以上未納が続いている会員が確認されたため、除籍処理を行う。

(3) 2020年度活動計画について（各委員会委員長）

- ・ 財務委員会（松井一美）
審議部分を参照。
- ・ 学術委員会（岡部大祐）
今年度活動の見通しについて報告がなされた。委員の間で協議しつつも、年次大会の開催方針を待って活動内容を決定するとしていた。オンラインでの年次大会開催では研究発表のみになるとのことであるため、2018年度より継続の学会創設20周年記念事業については、実施の有無と形態を含めて継続協議していく。
- ・ 編集委員会（金本伊津子）
学会誌への投稿状況の報告がなされた。合計で14本の投稿があり、例年並みと言える（論文9本、研究ノート5本）。現在、編集委員会より査読者に依頼中である。
- ・ ニュースレター委員会（内藤伊都子）
ニュースレター76号の発行が完了したことの報告がなされた。次号は2月頃、年次大会についても掲載できるように進めていく。
- ・ 選挙管理委員会（小坂貴志）
今年度が選挙の年となるため、適任者の推薦をお願いしたいとの依頼がなされた。

地区研究会より報告

- ・ 北海道・東北地区研究委員会（馬場智子）
新型コロナウイルスの影響で、外出・移動を許可しない大学もあり、研究会活動は現状行われていないことが報告された。

- 関東地区研究会（武田礼子）
昨年度の3月、地区研究会委員で話し合いをした時点での報告がなされた。年2回行われる地区研究会のうち、第1回は（今回の）理事会に合わせて計画されていた。しかし、新型コロナウイルスの影響から、第1回研究会はこのまま見送りになりそうな見込みである。第2回（1月中旬から下旬を検討している。大学後期が終わる前あたりで、入試時期に入る前が望ましい）は、武田委員長による研究会（発表）実施を検討中である。
 - 中部・関西地区（宇治谷映子）
委員長欠席のため報告なし。
 - 中国・四国地区（江藤由香里）
第1回地区研究会が3月8日に予定されていたものの、新型コロナウイルスの影響で開催が延期となった。依頼している講師からは、できる状況になれば対応していただけるということなので、様子を見て開催を予定している。
 - 九州地区（小林浩明）
委員長欠席のため報告なし。
- (4) 学会誌編集委員会からの報告
→上記参照。
- (5) 多文化関係学会 WG について
田中真奈美事務局長から報告がなされた。2020年4月18日午後ミーティングを実施した。継続調査・審議中。近日もミーティングを実施予定であり、次回理事会で報告可能であると考ええる。
- (6) その他
なし。

2. 審議事項

(1) 2020年度予算について

2020年度予算案について理事による審議がされ、承認された。決算手続きの時期についても確認され、理事会で承認がされた（通常は臨時総会にて予算案の審議をしているが、2019年度第3回理事会にて、臨時総会に代え、理事会にて予算案の審議が可能になった）。決算報告は、例年は年次大会での総会で会員に報告する形となっているため、オンラインでの年次大会となった場合には、決算報告の形についても引き続き協議していく。

***予算案をご覧になりたい方は、事務局までお問い合わせください。**

(2) 2020 年度大会について

今年度の年次大会をオンライン形式での実施とすることが審議され、承認された。年次大会の実施形式については、秋に年次大会を行う学会は通知を開始しているところがあるため、本学会も早めに会員に周知していくことが確認された。

(3) 2021 年度大会について

来年度に新型コロナウイルスの状況が鎮静化しているという保証はない。学会WGにて継続協議とする。

(4) 2020 年度総会について

オンラインでの年次大会となり、どのように総会を実施するか検討する必要がある。総会の内容を文書化して会員に配布することも可能ではある。他学会ではオンラインで総会を実施していた事例もある。事務局と大会準備委員会とで協議していく。年次大会のウェブサイトを活用するなど、方法を探る。

(5) その他

なし。

*2020年度第2回理事会（Zoomミーティングを予定）

日時：2020年8月2日（日）13:30～

第2回理事会を上記日程に決定し、14:38 に閉会した。

以上

■第2回理事会 議事録

日時：2020年8月2日（日）13時半～15時

場所：オンライン開催（Zoom）

出席者：田中、内藤、宇治谷、田崎、河野、出口、金本、松井、小坂、岡村、岡部、湊、小林、江藤（敬称略・順不同）

欠席者：武田、（委任状あり）畠中、馬場（敬称略・順不同）

1. 報告事項

(1) 事務局からの報告

- ・現時点での会員数は、正会員238名、学生62名、シニア5名、合計305名。
- ・学会HPが2015年から更新されていない。また、J-stageに2015年度以降学会誌がアップされていない。2016～2018年については、アップできるようにインターブックスへ手配済み。

(2) 第19回年次大会準備委員会からの報告

- ・大会ホームページを作成済み。オンライン開催ならではの注意事項を特記予定。
- ・8月10日が発表申し込み締め切り日であるが、現時点での申し込みは一件のみ。
- ・予算に関しては、問題なし。

(3) 地区研究会委員会からの報告

- ・北海道・東北地区研究会、および関東地区研究会は、委員長欠席のため報告なし。
- ・中国・四国地区研究会は、3月に見送りになった研究会を今年度に行う予定。
- ・九州地区研究会は、今後企画を行う。

(4) 学会誌編集委員会からの報告

- ・査読結果が8月10日までに提出される。評価が分かれる場合、判定査読となる。判定査読の依頼は、8月11日以降となり、理事の先生方に協力依頼があった。
- ・「書き直し」と判定された場合、判定者に再度査読を依頼予定である。

(5) 多文化関係学会 WG からの報告

- ・6月13日、および7月25日にミーティングを実施した。学会誌の編集を電子化する件に関して、字数やカテゴリーなどまだ調査中。

(6) その他

- ・元会長の久米先生より「異文化コミュニケーション辞典」の電子書籍化に伴い発生する印税を本学会に寄付されたいと申し出があった。印税分の税金について、久米先生より春風社に確認していただき、結果を理事会に報告する。

2. 審議事項

(1) HP 更新について

- ・学会HPに掲載されている年次大会、学会誌の情報が更新されていないため、今後、適宜 Web 管理・広報委員に更新してもらうように依頼する。
- ・J-STAGEのHPへの学会誌アップロードは、2016年～2018年度については依頼済み。アップまでに1か月ほどかかる。その後、細かい内容を整理する予定である。
- ・J-STAGEへのリンクに関して、課金契約がなされているか事務局長が確認する。
- ・学会HP上では紀要検索が必要な場合、インターブックスのHPにリンクされる仕組みになっており、購入を促す仕組みになっている。

(2) その他

- ・大会の発表申し込み締め切り日について、例年通り一週間延期することが承認された。
- ・今年度が選挙の年であるため、任期の確認が必要である。
- ・今年度の石井奨励賞について、例年通り応募を募ることで承認された。告知は大会発表者の応募を延期する内容と一緒に告知される。審査委員は追って検討される。

*2020年度第3回理事会（大会前の打ち合わせとして）Zoomにて開催予定

日時：2020年10月11日（日）13:30～

以上

■第3回理事会 議事録

日 時：2020年10月11日（日）13時半～15時半

場 所：オンライン開催（Zoom）

出席者：田崎、湊、田中、松井、岡部、河野、畠中、金本、内藤、小坂、小林、出口
（敬称略・順不同）

欠席者：武田、江藤、岡村、馬場、宇治谷（委任状あり）（敬称略・順不同）

1. 報告事項

(1) 事務局からの報告

- ・現時点での会員数は、正会員240名、学生60名、シニア5名、合計305名。会費未払い者が5名。
- ・大会発表を前提に入会を希望される方へは、支払い期日をホームページ上に記載する方法も要検討。

(2) 第19回年次大会準備委員会からの報告

- ・オンライン開催のプログラム、注意事項をMLで配信済み。総会については、大会ホームページの一番下に明記。
- ・現時点の参加者は35名（発表者含む）。参加締め切りは、10月16日。
- ・今後、抄録集をML、大会ホームページで配信予定。

(3) 地区研究会委員会からの報告

- ・中部・関西地区研究会は、9月10日Zoom開催され、全国から27名が参加。
- ・中国・四国地区研究会は、11月3日Zoom開催予定。
- ・関東地区研究会は、今年度2回開催予定であったが1回実施できず。
- ・九州地区研究会は、9月19日にオンライン開催された。参加者は14名（学会員4名、他12名）であり、北海道、四国、韓国からの参加があった。年度内に、研究発表に関する研修会を開催予定。

(4) 学会誌編集委員会からの報告

- ・採択件数は4件。採択率28%、例年25%であり今年度は採択率が良い。現在、入稿段階で年内には終了予定。

(5) 多文化関係学会 WG からの報告

- ・学会誌の投稿規定の見直しについて、現在は原著・研究ノートの2ジャンルに限られるため、5つのカテゴリーを設けるべきか議論中。

(6) その他

- ・「異文化コミュニケーション事典」（春風社）の電子書籍化に伴い発生する印税の寄付は、受けることに決定。印税は、異文化コミュニケーション学会と折半した額を当学会へ寄付される予定。
- ・次回発行のNL は大会特集号となるが、今年度はオンライン開催に向けた大会総括的内容を大会委員長に執筆依頼予定。

2. 審議事項

(1) 本年度の決算書について

- ・2019年度収支決算書について、内容が審議され、承認された。総会で説明を行う予定。

(2) 次年度の大会について

- ・COVID-19の収束が予測できず、次年度については検討中。

(3) 選挙について

- ・例年通りのスケジュールで進め、年内に投票予定。12月30日頃の締め切りを設置し、自薦・他薦は11月16日頃とする。3月の理事会で新理事、会長、副会長を決定予定。
- ・今年度はweb投票とする。会員本人の投票の確認、複数回の投票の回避などweb投票の注意点を考慮する。委託先は要検討。

(4) その他

- ・特になし。

*2020年度第4回理事会（3月 Zoom）

3月12日（金）10時～

以上

地区研究会報告

■ 中部・関西地区研究会報告

日 時：2020年9月9日（木）13：30～15：30

場 所：Zoomでのリモート開催

話題提供者：石黒 武人（いしぐろ たけと）氏（武蔵野大学 准教授）

テーマ：「質的データ分析ワークショップ ～M-GTAにおける談話分析の援用～」

【講演内容】

本来は、3月14日に名古屋外国語大学での開催が予定されていましたが、COVID-19の感染拡大を受けて、開催日を9月9日に延期をするとともに、Zoomを使ってのリモート開催となりました。

前半の約1時間は「理論編」として、最初にM-GTAが依拠する質的研究について、「言語との関係」「さまざまある研究パラダイムの中での位置づけ」の2つについて説明がおこなわれました。その後、M-GTAの具体的な分析手順について解説がおこなわれました。

後半の「実践編」では、分析ワークシートの具体例を使って、インタビューデータの「バリエーション（語りの例）」から、「概念」の生成などをおこなう過程について、参加者自らが

考える機会を与えられながら学んでいきました。最後に、上述のような分析ワークシートの作成において有用な、談話分析概念の援用について、「フレーム」を例に解説いただき、その有用性についても学ぶことができました。

ワークショップ全体を通して、適宜Zoomのブレイクアウトルーム（グループ分け）機能を使って、少人数グループでの話し合いが挟まれるなど、話題提供者からの一方的なレクチャーとならないように配慮された、参加者が能動的に学ぶことのできるワークショップでした。予定されていた時間を超えて、話題提供者と参加者とのあいだで質疑が続くなど、大変充実した研究会となりました。

報告者：守崎 誠一（関西大学）

■ 中国・四国地区研究会報告

日 時：2020年11月3日（火）文化の日 14：00～16：00

場 所：Zoomにてオンライン開催

話題提供者：Stephen M. Ryan 氏（山陽学園大学総合人間学部言語文化学科 教授）

テーマ：Re-thinking “culture” as “difference” in the light of recent findings from Brain Science

【講演内容】

2020年3月8日（日）にライアン先生をお招きして上記テーマにて開催予定にしていた対面式研究会ですが、新型コロナウイルスの感染症拡大を受け、開催を延期させていただくこととなった。しかし、その後、感染状況は変わらないため、Zoomにて開催を試みることにした。テーマ内容が文化に関連していることから、「文化の日に文化について考えたい！」という私の目論見を、講師は快く引き受けてくださり、11月3日に研究会開催となった。



Stephen M. Ryan 氏

当日は講師の体験談をもとに、脳科学の観点から「文化」を「違い」として考え直すことの大切さを分かりやすく解説いただいた。先生のお嬢様が3歳の時には、母国語が異なる子ども同士でも一緒に遊ぶことができたのに、少し大きくなるとコミュニケーションがとれないという理由で一緒に遊ばなくなってしまったそうだ。この経験からライアン先生は、異文化という壁は人間がつくり出すのではないかと考えた。

1990年より脳科学の研究が進むと、知覚が脳に届けられる行程より、脳が感覚器からの情報を予測し知覚をつくりあげる行程のほうが遥かに多いことが判明した。また、感覚器を通して外から受け取る情報と脳の予測がくいちがうと、その差が新しい知覚となることが明らかになった。

異文化について学ぶとき、とりわけ国と国の

違いに着目し、文化として結論付けてしまう傾向にある。しかし講師は、文化にとらわれず、異なることに目を向けることによって「違い」を理解することができることを説明した。また、共通点を見つけ出してから「違い」に注目すると、異文化を理解しやすいことなどを教わった。

オンライン開催ということもあり、中国・四国地区以外の参加者があったことはもちろん、地区会員のゼミ生が多数参加してくれたことを嬉しく感じた。後に頂いた学生からのコメントには、ライアン先生の講義内容に刺激を受けた様子が伺え、これからは違う視点で物事を見る目が研究会によって養われたようだ。ライアン先生には専門用語が多い中、ご講演を日本語にて行っていただき、ご準備が大変だったこととお察ししますが、実り多き研究会になったこと感謝いたします。

報告者：江藤 由香里（山陽学園短期大学）

■九州地区研究会

日時：2020年9月19日（土）13：00～15：00

場所：オンライン（Zoom）開催

話題提供者：参加者全員

テーマ：「遠隔授業について語ろう！次の学期に備えるために」

【講演内容】

9月19日、多文化関係学会九州地区研究大会「遠隔授業について語ろう！～次の学期に備えるために～」がZoomによるオンライン形式で開催され、12名の参加者及び九州地区委員2名の合計14名が参加した。本研究会の目的は、新型コロナウイルス下で実施されている遠隔授業に関して、参加者が取り組んでいる異文化理解教育や外国語教育の実践の中で経験した気づき、問題点、今後の課題について、参加者間で自由に意見交換を行うことを通じて、遠隔授業を今後行っていく上での示唆を得るというものであった。

会合では、準備されたGoogleスプレッドシートに参加者が自己紹介文を記入し、一人ずつ遠隔授業の経験、問題点、利点等につき自由に述べた。遠隔授業に関する経験の内容として、リ

アルタイムで行った科目とオンデマンドの科目の効果の違いや、Zoom等のオンライン授業のツールの使い分けに関する感想やノウハウ、授業記録の蓄積の活用法等に関するコメントが寄せられた。また、授業中の「顔出し」の是非やその効果、テキストを遠隔で授業を受ける学生に配布する際の方法、著作権などの課題、学生の課題、答案へのフィードバックの整理等について体験談が述べられた。さらに、「遠隔授業のメリット・デメリットとして、遠方から気軽に参加できるという利点があるが、個別の指導がやりにくい」や、「学生・留学生の間でITスキルの習熟度のちがいが見られるものの、オンラインでの授業は出席率がよかった」、「Zoomのブレイクアウトセッションのほうが、制約の多い現在の対面方式の授業よりも授業の質が高かった」という声も聞かれた。

この後、予定されていた小グループによる討論の代わりに質疑応答が行われ、「オンライン授業は今後も継続すると思われるか」という質問や、「社会人向けのリカレント教育では遠隔授業は好評であるが、オンラインでは、ライブで行う授業と共に反転授業も同時に重要になっていくため、今後はそれらの組合せを考えていくことが必要」という意見が出された。

今回のオンラインによるオンライン授業に関する研究会は、コロナ渦のため一斉に導入された遠隔授業をめぐる意見交換の場となることで、これまで参加者が感じていたオンライン授業に関する問題点や疑問点を共有し、その要点を整理できたという点で有意義であった。遠隔授業やオンラインミーティングは、新たな手法に不慣れであることや、バーチャル空間における交流がもたらす違和感により、それを交流の手段



として飼いならしていくためにはさらに時間が必要であろうが、今回の研究会は、それぞれの地域からウェブ上のツールを活用し、課題を共有したり、それらについて議論したりすることができたという点で、この手法の利点を改めて認識する機会となった。

報告者：石松 弘幸（佐賀大学）

地区研究会のご案内

■北海道・東北地区研究会

普段（地理的理由で）会員の皆さんがなかなか顔を合わせにくい地域のため、状況が落ち着いてから対面をと考えておりましたが、先が見えない状況ですので、年度内にオンラインでの開催を検討しております。その際は、ぜひ他地区の会員の方もご参加をいただけましたら幸いです。どうぞよろしくお願いいたします。

（北海道・東北地区研究会委員長：馬場 智子）

■関東地区研究会

日時：2021年2月21日（日）13：30～15：00

開催方法：Zoomを用いたオンライン開催

話題提供者：齊藤 美野 先生・岡部 大祐 先生（順天堂大学国際教養学部）

テーマ：「翻訳の遍在性・多義性と領域横断可能性の検討：新たな問いを発見するために」

下記フォームより2月18日（木）までにお申し込みください。
（申込者には、事前にZoomのURLをメールでご案内いたします。）

<https://forms.gle/gcxXEMjaD2X614CG8>



【問い合わせ先：】 kantomulticultural@gmail.com

【内容】

翻訳は、「多様な文化の相互作用」（学会ウェブサイトより）に関わる可能性は高いだろうか。本講演は、翻訳が異文化間のやりとりについて考究する際の一つの視点となり、新たな問いの発見を促すものとなる可能性を、すなわち翻訳学と異分野の領域横断可能性を、翻訳の遍在性と多義性の2つの側面を踏まえて、参加者とともに探る機会としたい。翻訳の遍在性とは、私たちの暮らしのなかに翻訳によって成り立っているものが数多存在するということである。私たちは、翻訳との関わりを意識しないまま、何かを享受していることが多々ある。書籍や映像作品などは訳出物であることがわかりやすい一方、報道やマニュアル、またこの文章を書いている言語である日本語の成立にも、翻訳が関わっていることは比較的意識に上りにくい。そういった普段は意識しないものまで含め、さまざまな事柄に翻訳が関与していることを前提とすれば、異分野を専門とする各人の研究対象にも、翻訳が関わりをもつ可能性を検討する価値はあるのではないだろうか。2つ目の側面として挙げた多義性は、翻訳が異言語間のことばの置き換えにとどまらないことにある。広義の「翻訳」概念においては、同言語使用者間のコミュニケーションであっても、翻訳行為が関わっていると考えることが可能であり、多様なコミュニケーションを「翻訳」として考察しうる。以上の2側面を齊藤が提示したうえで、翻訳学と異分野の連携方法を、またそこから新たな問いが発見される可能性を、コミュニケーション研究を専門とする岡部と検討する。参加者の方々のご専門分野との領域横断可能性についても、ともに考える時間を設けたい。

※ カメラオンでのご参加をお願いする可能性があります。差し支えのない範囲で、お願いできましたら幸いです。

【話題提供者】

齊藤 美野 (SAITO, Mino)

順天堂大学国際教養学部准教授。立教大学大学院異文化コミュニケーション研究科博士後期課程修了。博士（異文化コミュニケーション学）。専門は翻訳学。明治期の翻訳作品や、文学作品を中心に、文化・社会・思想面から翻訳研究に取り組む。著書に『近代日本の翻訳文化と日本語：翻訳王・森田思軒の功績』（2012）ミネルヴァ書房。

岡部 大祐 (OKABE, Daisuke)

順天堂大学国際教養学部異文化コミュニケーション領域講師。青山学院大学大学院国際コミュニケーション専攻博士後期課程修了。博士（国際コミュニケーション）。主な研究領域は（ヘルス/異文化間）コミュニケーション、談話社会心理学、社会言語学等。監訳書に『グラウンデッド・セオリーの構築』[第2版]（原著：キャシー・シャーマズ）（2020）ナカニシヤ出版。

（関東地区研究会委員長：武田 礼子）

お知らせ

会員新書紹介

■『どこへ行っても恥をかかない世界の「常識」図鑑』

著書：御手洗昭治（編著）・小笠原はるの（著）

出版社：総合法令出版（¥1,300+税）

出版年：2021年1月

内容：外国の「常識」を知ることは簡単ではありません。「常識」は、その国の皆が共有しているため明確には明文化されていないことが多く、「暗黙の了解」となってしまうがちです。そこで、本書では異文化コミュニケーションに役立つ世界の「常識」を142個ピックアップし、一般読者用にイラスト付で分かりやすく説明しました。日常生活で使える挨拶、異文化ビジネス・マナー、冠婚葬祭のマナーに至るまで、日本人が間違いやすいもの、意外に感じるものを選びました。



Web 管理・広報委員会より

《登録事項の更新をお願いします》

■会員専用サイトでの所属・住所等の変更

ご所属・e-mailアドレスなど会員登録情報の更新をおねがいたします。会員登録情報の変更は会員各自で行えます。登録情報を更新しなければ学会からのお知らせが届きません。登録情報に変更があった場合は更新をよろしくお願い致します。また、e-mailアドレスについては、現在使用されていないアドレスの方がいらっしゃいますので、今一度ご確認ください。なお、IDやパスワードがお分かりにならない方は、畠中 hatankao@hirakata.kmu.ac.jp（全角の@を半角の@に変更してください）宛に御連絡下さい。

■登録情報の更新手順

1. 多文化関係学会ホームページ（URL: <http://www.js-mr.org/>）
2. 学会員専用サイト（会員番号・パスワードを入力し、ログインボタンをクリック）
3. 登録情報更新をクリック
4. 変更点を修正し、一番下の更新をクリック

（Web管理・広報委員会委員長：畠中 香織）

学術委員会より

今年度はオンライン大会の開催のため、学会創設20周年記念事業連続シンポジウムは延期となりました。次年度に向けてさらに磨きをかけた企画にしていく予定です。ご期待ください。また、全国大会で一部予告いたしましたように、学会創設20周年にあたり記念出版企画を進めております。来年度初頭には詳細をお知らせできる見込みです。会員のみなさまからの論考も募集する予定です。

（学術委員会委員長：岡部 大祐）

■「多文化関係学第17巻」発刊に関するご報告

学会誌第17号が完成いたしました。1月中には会員の皆様のもとにお届けできると思います。今年度の投稿論文は、全部で14件（論文9件、研究ノート5件）ございました。2020年当初から始まりましたコロナ禍にもかかわらず、また、今年度に関しては判定査読が思いのほか多くございましたが、論文2本と研究ノート2本を掲載できましたことは、査読委員の先生方ならびに学会誌編集委員会の編集委員の先生方の本学会誌へのご協力の賜物と心より感謝申し上げます。いずれも異文化がせめぎあう現場におけるフィールドワークやインタビューなどの質的研究に加え、内容分析による量的研究もあり、多様性のある充実した学会誌となりましたので、ぜひともご一読いただければ幸いです。

次号（学会誌第18号）は、例年通り投稿論文・研究ノートの受付を行います。次号への締め切りは4月30日（必着）となっておりますので、皆様、奮ってご投稿をお願いいたします。なお、ご執筆・ご投稿をご検討いただいております会員の皆様におかれましては、査読および校正の作業を円滑に進めるためにも、執筆・投稿前にぜひとも巻末にあります「投稿規定」ならびに「執筆要領」をご参照いただければと思います。また、本学会誌は「執筆要領第5条」にありますとおり、米国心理学会の規定（APA第6版）に準拠しておりますので（日本語論文は日本心理学会の「執筆・投稿の手引き」を参照）、これらをご参考にしていただけますようお願い申し上げます。（2019年10月に発行されましたAPAの第7版の取り扱いに関しては、第18号の投稿に関しては執筆要領にありますとおり第6版を採用いたします。）

今年度の任期満了をもちまして、編集委員長と副委員長が交代いたします。2016年度から2020年度の学会誌編集委員会におきましては、投稿しやすい学会誌を目指しての字数制限の緩和、査読作業と編集作業の軽減のための投稿規定ならびに執筆要領の改定、投稿論文の採択率向上のための地域研究会や年次大会におけるワークショップの企画など様々な提案を積極的に行ってまいりました。2019年からは、電子化を含めた学会誌のリニューアルをワーキンググループに対して提案してまいりました。2021年度におきましては、これを踏まえまして、新しい編集委員長と副委員長によって新しい取り組みが始まることと思います。

最後になりますが、会員の皆様から賜りました多大なご支援に感謝を述べるとともに、今後とも学会誌の発行に変わらぬご協力を賜りますようお願い申し上げます。

■2020年度学会誌編集委員会

委員長	金本 伊津子（桃山学院大学）
副委員長	岡村 郁子（東京都立大学）
委員	大澤 麻里子（東京大学）
委員	クリス オリバー（上智大学短期大学部）
委員	坂井 伸影（名古屋大学）
委員	鳥塚 あゆち（関西外国語大学）
委員	中野 遼子（大阪大学）
委員	奴久妻 駿介（都留文科大学）
委員	平山 修平（桜美林大学）
委員	水松 巳奈（東洋大学）
委員	矢元 貴美（大阪大学）
委員	叶 尤奇（神田外語大学）
アドバイザー	原 和也（順天堂大学）

（学会誌編集委員会委員長：金本 伊津子）

事務局より

新型コロナウイルス感染拡大がなかなか収まらず、多くの大学が授業の実施に苦勞されていると思います。新しい生活にも慣れてきているのでしょうか。非日常の日々が続いていると思いますが、皆様にはお変わりなくお過ごしであることを願っています。

現事務局体制も2期目の2年目も後数か月となりました。事務局一同、皆様のお力添えいただいたおかげで、無事に2期4年を務めあげることができました。心より感謝いたします。

以下、事務局からのお知らせです。

お問い合わせ内容によって、連絡先が異なります。事務作業の効率化・削減のためにも、会員の皆様にはお手数ですが、該当する問い合わせ先にご連絡くださるようお願いいたします。

■事務局所在地について

〒120-0023 東京都足立区千住曙町34-12

東京未来大学 モチベーション行動科学部

田中 真奈美 研究室内：多文化関係学会事務局

*Eメールアドレス admin@js-mr.org (全角の@を半角の@に変更してください)

■会費納入状況に関するお問い合わせについて

2019年度より、委託先が変更となりましたので、お知らせします。

お問い合わせは、会費に関する業務を委託しております [株式会社アクセライト](http://www.accelight.co.jp) jsmr@accelight.co.jp (全角の@を半角の@に変更してください) までお願い致します。その際、メールの件名は「多文化関係学会」とし、ご自分の氏名、会員番号、ご用件をお書きください。

また、退会希望の場合も、会費納入状況の確認と合わせて、[株式会社アクセライト](http://www.accelight.co.jp)へご連絡ください。

3月末日までにお知らせがない場合は、自動的に会員資格が更新されます。

■住所・所属などに変更について

大変お手数ですが、学会員専用サイトにログインし、**ご自分で情報を更新していただく**とともに、送付物の住所を管理している [株式会社アクセライト](http://www.accelight.co.jp)にもご連絡ください

■学会ホームページ「学会員専用サイト」の会員番号とパスワードについて

学会ホームページ (HP) <http://www.js-mr.org/> では、登録情報の更新などを行える「学会員専用サイト」があります。情報の確認及び更新をお願い申し上げます。学会員専用サイトへのログインには、会員番号とパスワードが必要です。お忘れになった方は、[事務局](http://www.js-mr.org/) admin@js-mr.org (全角の@を半角の@に変更してください) までお問い合わせください。

■学会誌『多文化関係学』バックナンバーの販売について

学会誌の販売は、[株式会社インターブックス](http://www.interbooks.co.jp/)に委託いたしております。学会誌バックナンバーのご購入をお考えの会員の方々は、恐れ入りますが、学会事務局ではなく [インターブックス](http://www.interbooks.co.jp/)にお問い合わせください。

ホームページ： <http://www.interbooks.co.jp/>

メールアドレス： info_ml@interbooks.co.jp (全角の@を半角の@に変更してください)

電話番号： 03(5212)4652 ファクス番号： 03(5212)4655

なお、学会誌『多文化関係学』の論文は、論文検索サイトJ-STAGEにおいて順次掲載されております。

(事務局長:田中 真奈美)

新入会員紹介（敬称略、入会順）

会員資格	氏名	所属	研究分野 / 業務内容
学生会員	張 慧穎	お茶の水女子大学 博士後期課程 人間発達科学専攻	教育科学領域
正会員	高濱 愛	順天堂大学	異文化コミュニケーション
正会員	志賀 玲子	東京経済大学	日本語教育 日本語教員養成 異文化教育
正会員	服部 圭子	近畿大学生物理工学部	言語文化学・社会言語学 / 英語教育
学生会員	小張 真理子		社会人類学、地域研究、持続可能な開発
正会員	大和久 吏恵	日本女子体育大学	英国児童文学、応用言語学
正会員	竹内 陽介	立命館大学言語教育センター	移民の子供に対する言語教育
正会員	佐藤 昭宏	ベネッセ教育総合研究所	職業教育、文化心理学、実践共同体、質的研究

（2020年5月1日から2020年12月31日に入会された方）

ニュースレター委員会より

■ 著作図書案内・書評・海外シンポジウム参加報告記事募集

ニュースレター委員会では、次回39号（2021年6月発行予定）掲載記事として、会員の皆様の著作図書案内、海外シンポジウム参加報告、震災関連や多文化関係学会に関連した研究、関連学会参加報告記事などを募集しております。以下(1)から(3)の記事をNL委員会に送ってくださいますようお願いいたします。

募集する記事の内容

- (1) 学会の趣旨に関連すると思われる著作・訳書などを出された場合
募集対象とする著作の発行時期：2021年1月から2021年4月末まで
書名、著者名、出版社名、出版年、総ページ数と本の内容を200字程度で紹介
 - (2) 学会の趣旨に関連すると思われる著作で、会員に広く紹介することが望ましいと思われる場合
募集対象とする著作の発行時期：2021年1月から2021年4月末まで
書名、著者名、出版社名、出版年、総ページ数と本の書評を200字程度でまとめる
 - (3) 学会に関連する海外のシンポジウムや震災関連のシンポジウム、もしくは関連学会に参加された場合
募集対象とする時期：2021年1月から2021年4月末まで
- ◆ 記事の送付期日：2021年5月6日
 - ◆ 記事の送付先：NL委員会 内藤 伊都子 宛 itnaito@ed.tokyo-fukushi.ac.jp（全角の@を半角の@に変更してください）

■ 関連学会の大会紹介記事の募集

会員に紹介するのにふさわしい関連学会の大会情報を随時募集しております。具体的には、(1)学会名、(2)大会名、(3)大会テーマ、(4)大会日時、(5)会場、(6)その他詳細(120字程度)をお書きのうえ、NL委員会委員長の内藤 伊都子宛 itnaito@ed.tokyo-fukushi.ac.jp（全角の@を半角の@に変更してください）に送ってくださいますようお願いいたします。

（NL委員会委員長：内藤 伊都子）

編集後記

ニュースレター第38号をお届けいたします。今号は、コロナ禍での開催となりました第19回年次大会特集です。多文化関係学会としては初となるオンライン大会の様子を振り返り、準備委員会の先生方にそれぞれお伝えいただいております。地区研究会におきましても、オンライン開催の報告や今後の開催予定を掲載しております。オンライン開催により、遠方の方やご多忙の方など、ご参加しやすくなる面もあると思われまますので、次号では多くの会員の皆さまの研究活動の様子をお届けできればと思います。また、第20回年次大会のお知らせや新理事会についてもお届けする予定です。

ニュースレター委員会では、今後も会員の皆さまの研究に役に立つ情報を随時募集しておりますので、“ニュースレター委員会より”をご参考に、記事をお寄せいただければ幸いです。

(NL委員会：内藤 伊都子・守崎 誠一)